

旅僧（一人坊主）

泉鏡花作

上

去にし年秋のはじめ、汽船加能丸の百餘の乗客を
搭載して、加州金石に向ひて、越前敦賀港を發する
や、一天麗朗に微風船首を撫で、海路の平穩を極
めたるにも關はらず、乗客の面上に一片暗愁の雲は
懸れり。

蓋し薄弱なる人間は、如何なる場合にも多くは己
を恃む能はざるものなるが、其の最も不安心と感ず
るは海上ならむ。

然れば平日然までに臆病ならざる輩も、船出の際
は兎や角と縁起を祝ひ、御幣を擔ぐも多かり。「一
人女」「一人坊主」は、暴風か、火災か、難破か、
いづれにもせよ危険ありて、船を襲ふの兆なりと言
傳へて、船頭は太く之を忌めり。其日の加能丸は偶
然一人の旅僧を乗せたり。乗客の暗愁とは他なし、

此の不祥を氣遣ふにぞありける。

旅僧は年紀四十二三、全身黒く瘦せて、鼻隆く、眉濃く、耳許より頤、頤より鼻の下まで、短き髭は斑に生ひたり。懸けたる袈裟の色は褪せて、法衣の袖も破れたるが、服装を見れば法華宗なり。甲板の片隅に寂莫として、死灰の如く跣坐せり。

加越地方は殊に門徒眞宗、歸依者多ければ、船中の客も又門徒七八分を占めたるにぞ、然らぬだに忌はしき此の「一人坊主」の、別けて氷炭相容れざる宗敵なりと思ふより、乞食の如き法華僧は、恰も加能丸の滅亡を宣告せむとて、惡魔の遣はしたる使者としも見えたりけむ、乗客等は二人三人、彼方此方に額を鳩めて呶々しつゝ、時々法華僧を流眄に懸けたり。

旅僧は冷々然として、聞えよがしに風説して惡様に罵る聲を耳にも入れざりき。

せめては四邊に心を置きて、肩身を狭くすくみ居たらば、聊か恕する方もあらむ、遠慮もなく席を占

めて、落着き澄したるが憎しとて、乗客の一人は衝
と其の前に進みて、

「御出家、今日の御天氣は如何でせうな。」

旅僧は半眼に閉ぎたる眼を開きて、

「さればさ、先刻から降らぬから、お天氣でござ
らう。」と言ひつゝ空を打仰ぎて、

「はゝあ、是はまた結構なお天氣で、日本晴と謂
ふのでござる。」

此の暢氣なる答を聞きて、渠は呆れながら、

「そりや、誰だつて知つてまさ、私は唯急に天氣
模様が變つて、風でも吹きやしまいかと、其をお聞

き申すんでさあ。」

「那樣事は知らぬな。私は目下の空模様さへお前
さんに聞かれたので、やつと氣が着いたくらゐぢや
もの。いや又雨が降らうが、風が吹かうが、そりや
何もお天氣次第ぢや、此方の構ふこつちや無いて

な。」

「飛んだ事を。風が吹いて耐るもんか。船だ、も
し、私等御同様に船に乗つて居るんですぜ。」

と渠は良怒を帯びて聲高になりぬ。旅僧は少しも

騒さわがず、

「成程なるほど、船ふねに居ゐて暴風雨あに逢あへば、船ふねが覆かへるとでも謂いふ事ことかの。」

「知しれたこつたわ。馬鹿ばか々々／＼しい。」

渠かれの次第しだいに急せきこ込むほど、旅僧たびそうは益ますます落おちつ着つきぬ。

「して又また、船ふねが覆かへれば生命いのちを落おとさうかと云いふ、其その心配しんぱいかな。いや詰つまらぬ心配しんぱいぢや。お前まへさんは何かなに（人相見にんさうみ）に、水難すゐなんの相さうがあるとでも言いはれたことことがありますかい。まづ／＼聞ききなさい。さも無なければ那樣そんなことを恐こはがると云いふ理窟りくつがないて。一體いったいお前まへさんに限かぎらず、乗合のりあひの方々かた／＼も又然またさうぢや、初手しよてから然さほど生命いのちが危険けんげんだと思おもつたら、船ふねなんぞに乗のらぬが可いいて。また生命いのちを介かまはずに乗のつた衆しうなら、風かぜが吹ふかうが、船ふねが覆かへらうが、那樣事そんなことに頓着とんちやくは無ない筈はずぢやが、恚かう見渡みわたした處ところでは、誰方どなたも怯氣びく／＼々々／＼もので居ゐらるゝ様子やうすぢやが、さて／＼笑止せうしせんばん千萬／＼な、水みづに溺おほれやせぬかと、心配しんぱいする様やうな者は、何どの道みちはや平生へいせいから、後生ごしやうの善いい人ひとではあるまい。

先まづ人ひとに天てん氣きを問とはうより、自じ分ぶんの胸むねに聞きいて見みるぢやて。

「己は難船に會ふやうなものか、何うぢや。」と、其處で胸が、（お前は随分罪を造つて居るから何うだか知れぬ。）と恚う答へられた日にや、覺悟もせずばなるまい。もし「否、悪い事をした覺もないから、那樣氣遣は些とも無い。」と恚うありや、何の雨風ござらばござれぢや。喃、那樣ものではあるまいか。

して見るとお前さん方のおど／＼するのは、心に覺束ない處があるからで、罪を造つた者と見える。懺悔さつしやい、發心して坊主にでもならつしやい。（一人坊主）だと言つて騒いでござるから丁度可い、誰か私の弟子になりなさらんか、而して二三人坊主が出来りや、もう（一人坊主）ではなくなるから、頓と氣が濟んで可くござらう。」

斯く言ひつゝ法華僧は哄然と大笑して、其まゝ其處に肱枕して、乗客等がいかに怒りしか、いかに罵りしかを、渠は眠りて知らざりしなり。

身邊あたりにの人聲ひとごゑの騒さわがしきに、旅僧たびそうは夢破ゆめやぶられて、唯見とみれば變かはり易やすき秋あきの空そらの、何時いつしか一面めんかきくも搔曇かきくもりて、暗あん澹たんたる雲くもの形かたちの、凄すさまじき飛ひてん天や夜しや叉ごとの如ごときが縦横無盡じゅうわうむじんに馳はせ廻まはるは、暴風雨あらしの軍いくさを催もよほすならむ、其その一團だんは早はやく既すでに沿岸えんがんの山やまの頂いたゞきに屯たむろせり。

風かぜ一陣ひとしきり吹き出いで、船ふねの動搖どうえつ良激よはげしくなりぬ。恚かくの如ごとき風雲ふうんは、加能丸かのうまる既往きわうの航海かうかい上珍じやうめずらしからぬ現象げんじ象やうなれども、(一人坊主ひとりぼんず)の前兆ぜんてうに因よりて臆測おくそくせる乗客じやうかくは、恚かる現象げんじやうを以もつて推すすべき、風雨ふうの程度ていどよりも、寧むしろ幾いく十倍ばいの恐おそれを抱いだきて、渠かれさへあらずば無事ぶじなるべきにと、各我命おのゝわがいのを惜をしむ餘あまに、其死そのしを欲ほつするに至いたるまで、怨恨骨髄うらみこつずゐに徹てつして、此この法華僧ほつげそうを憎にくみ合あへり。

不幸ふかうの僧そうはつく／＼此状このさまを三みし、慨然がいぜんとして、
 「あゝ、末世まつせだ、情なさけない。皆みんなが皆みんなで、恚かう又信仰またしんかうの弱よわいといふは何どうしたものでぢやな。此處こゝで死しぬも

のか、死なゝいものか、自分で判断をして、活き
と思へば平氣で可し、死ぬと思や靜に未來を考へて、
念佛の一つも唱へたら何うぢや、何方にした處が、
わい／＼騒ぐことはない。はて、見苦しいわい。

然し私も出家の身で、人に心配を懸けては濟むま
い。可し、可し。」

と渠は獨り頷きつゝ、從容として立上り、甲板の
欄干に凭りて、犇き合へる乗客等を顧みて、

「いや、誰方もお騒ぎなさるな。もう斯うなつち
や神佛の信心では皆の衆に埒があきさうもないに依
つて、唯私が居なければ大丈夫だと、一生懸命に信
仰なさい、然うすれば屹度助かる。宜しいか／＼。

南無、

と一聲、高らかに題目を唱へも敢へず、法華僧は
身を躍らして海に投ぜり。

「身投だ、助ける。」

船長の命の下に、水夫は一躍して難に赴き、辛う
じて法華僧を救ひ得たり。

然りし後、此の（一人坊主）は、前とは正反對の

位置に立ちて、乗合をして却りて我あるがために船の安全なるを確めしめぬ。

如何となれば、乗客等は爾く身を殺して仁を為さむとせし、此大聖人の徳の宏大なる、天は其の報酬として渠に水難を與ふべき理由のあらざるを斷じ、恚る聖僧と與にある者は、此結縁に因りて、必ず安全なる航行をなし得べしと信じたればなり。良時を経て乗客は、活佛——今新たに然か思へる——の周圍に集りて、一條の法話を聞かむことを希へり。漸く健康を回復したる法華僧は、喜んで之を諾し、打咳きつゝ語出しぬ。

「私は一體京都の者で、毎度此の金澤から越中方へ出懸けるが、一度ある事は二度とやら、船で（一人坊主）になつて、乗合の衆に嫌はれるのは今度がこれで二度目でございます。今から二三年前のこと、其時は、船の出懸けから暴風雨模様でな、風も吹く、雨も降る。敦賀の宿で逡巡して、逗留した者が七分あつて、乗つたのはまあ三分ぢやつた。私も其時分は果敢ない者で、然云ふ天氣に船に乗るのは、實は

二の足の方であつたが。出家の身で生命を惜むかと、人の思は／＼も恥かしくて、怯氣々々もので乗込みましたぢや。さて段々船の進むほど、風は荒くなる、波は荒れる、船は揺れる。其又揺れ方と謂うたら一通でなかつたので、吐くやら、呻くやら、大苦で正體ない者が却つて可羨しいくらゐ、と云ふのは、氣の確なものほど、生命が案じられるでな、船が恚うぐつと傾く度》に、はツ／＼と冷い汗が出る。さてはや、念佛、題目、大聲に鯨波の聲を揚げて唸つて居たが、やがて其も蚊の鳴くやうに弱つてしまふ。取亂さぬ者は一人もない。

恚云ふ私が矢張その、おい／＼泣いた連中でな、面目もないこと。

昔彼の文覺と云ふ荒法師は、佐渡へ流される船路で、暴風雨に會つたが、船頭水夫共が目の色を變へて騒ぐにも頓着なく、大の字なりに寝そべつて、雷の如き高鼾ぢや。

すると船頭共が、「恚麼惡僧が乗つて居るから龍

神が崇るのに違ひない、疾く海の中へ投込んで、此万人等は助からう。」と寄つて集つて文覺を手籠にしようとする。其時荒坊主岸破と起上り、舳に突立ツて、はつたと睨め付け、「いかに龍神不禮をすな、此船には文覺と云ふ法華の行者が乗つて居るぞ！」と大音に叱り付けたと謂ふ。

何と難有い信仰ではないか。強い信仰を持つて居る法師であつたから、到底龍神如きがこの俺を沈めることは出来ない、波浪不能没だ、と信じて疑はぬぢやから、其處でそれ自若として居られる。

又死んでも極樂へ確に行かれる身ぢやと固く信じて居る者は、恁云ふ時には驚かぬ。

まあ那様事は措いて、其時船の中で、些とも騒がぬ、いやも頓と平氣な人が二人あつた。美しい娘と可愛らしい男の兒ぢや。姉弟と見えてな、似て居ました。

最初から二人對座で、人交もせぬで何か睦まじさ

うに話を^{はなし}して居^ゐたが、皆^{みんな}がわい／＼言^いつて立^{たち}騒^{さわ}ぐのを見^みようともせず、まるで別^{べつ}世界^{せかい}に居^ゐるといふ顔^{かほ}色^{しき}での。但^{たゞ}金^{かね}石^{いし}間^ま近^{ぢか}になつた時^{とき}、甲^{かん}板^{ばん}の方^{ほう}に何^{なに}か知らん恐^{おそ}しい音^{おと}がして、皆^{みんな}が、きやッ！と叫^{さけ}んだ時^{とき}ばかり、少^{すこ}し顔^{かほ}色^{いろ}を變^かへたぢや。別^{べつ}に仔^し細^{さい}もなかつたと見^みえて、其^{その}内^{うち}静^{しづ}まつたが、姉^{きやう}弟^{たい}は立^たちさうにもせず、まことに常^{つね}の通^{とほ}りに、澄^{すま}して居^ゐたに因^よつて、餘^{あま}り不^ふ思議^{しぎ}に思^{おも}つたから、其^{その}日^ひ難^{なん}なく港^{みなと}に着^ついて、姉^{きやう}弟^{たい}が建^{だて}場^ばの茶^ち屋^やに腕^く車^{るま}を雇^{やと}ひながら休^{やす}んで居^ゐる處^{ところ}へ行^いつて、言^{こと}葉^はを懸^かけて見^みようとしたが、其^{その}子^こ達^{たち}の氣^け高^{たか}さ！ 貴^{たか}さ！ 思^{おも}はず此^この天^あ窓^まが下^さつたぢや。

そこで土^ど間^まへ手^てを支^{つか}へて、「何^どういふ御^ご修^{しゆ}行^{ぎやう}が積^つんで、あ^あのやうに生^{しやう}死^じの場^ば合^{あひ}に平^{へい}氣^きでお在^いなされたと、恐^{おそ}れ入^いつて尋^{たづ}ねました。

すると答^{こた}へには、「否^いえ、私^{わたくし}等^{ども}は東^{とう}京^{きやう}へ修^{しゆ}行^{ぎやう}に參^まつて居^ゐるものでござるが、今^{こん}度^ど國^{こく}許^{じよ}に父^{ちち}が急^{きふ}病^{びやう}と申^ます電^{でん}報^{ぱう}が懸^かつて、其^{それ}で歸^{かへ}るのでござるが、急^{いそ}いで見^み舞^まはんければなりませんので、止^やむを得^えず船^{ふね}にしました。しかし父^{おと}様^{さま}には私^{わたくし}達^{たち}二人^{ふたり}の外^{ほか}に、子^こと云^いふものはご

ざらぬ、二人にもしもの事がありますれば、家は絶えてしまひます。父様は善いお方で、其きり跡の断えるやうな悪い事為置かれた方ではありませんから、私どもは甚麼危い恐い目に出會ひましても、安心でございます。それに私が危ければ、此の弟が助けてくれます、私もまた弟一人は殺しません。其で二人とも大丈夫と思ひますから。少しも恐くはござらぬ。」と恚う云ふぢや。私にはこれまで讀んだ御經より、餘程難有くて涙が出た。まことに善智識、そのお庇で大きに悟りました。

乗合の衆も何がなしに、自分で自分を信仰なさい。船が大丈夫と信じたら乗つて出る、出た上では甚麼颱風が来ようが、船が沈まうが、體が溺れようが、なに、大丈夫だと思つてござれば、些とも驚くことはない。こりやよし死んでも生返る。もし又船が危いと信じたらば、乗らぬことござるぞ。何でもあやふやだと安心がならぬ、人を恃むより神佛を信ずるより、自分を信仰なさるが一番ぢや。」

船の港に着きけるまで懇に説聞かして、此殺身為

仁にんの高僧かうそうは、飄然へうぜんとして其名そのなも告つげず立去たちさりにけり。

【完】